

埋め立てで縮小する三番瀬 干潟が育む、生き物の命



三番瀬の埋め立てについて説明する船橋市三番瀬環境学習館の小澤さん

当時、漁を盛んにやっていた三番瀬は今は大きく姿を変えている。昔は今よりも大きかったという。今の大きさは約1800畝。浦安、市川、船橋、習志野という4つの市に面している。

漁法についてもかなり進化している。昔は風力を利用して「うたせ網漁」だったが、現在はエンジンを利用して「巻き網漁」や「底引き漁」に変化している。



松の木があったとされる場所に案内してくれた市教育委員会の坂本さん

民話「雪解け塚の白へび」に登場する白へびが住んでいる木は千葉県船橋市にある。夏見城にあったとされているが、城さえも今は残っていない。土塁というのは土を盛り上げた築かれた壁で、城への敵の侵入を防ぐために作られているが、城さえも今は残っていない。

一歩踏み出せば民話の世界 裏山に潜む謎

船橋市内の児童が、地元で伝わる民話「雪どけ塚の白へび」をテーマに取材や写真撮影など新聞制作に挑戦した。日本財団などオールジャパンで推進する「海と日本プロジェクト」の一環で、国内に残された海にまつわる「民話」伝承を選定し、子どもがさらに次世代へと伝える機運醸成を狙っている。船橋市立船橋小学校5年の有賀悠晴さんが執筆した紙面を紹介する。

海の異変に揺れる 三番瀬の漁業 自然の宝、干潟を未来へ



飯塚海苔店に海苔の歴史を学びに行った有賀記者

船橋市三番瀬環境学習館の小澤さんによると、三番瀬では赤潮と青潮という問題が起きている。青潮は酸素が極端に不足する。これにより魚や貝などの生き物が死んでしまう。干潟がある海は潮が引いた時、酸素が補充される。だが、埋め立てが増えたり、干潟が減ったり、酸素の少ない海が増えたり、赤潮は三番瀬の名物でもある海苔の栄養不足を引き起こす。有明海でも赤潮により海苔の不作が続いている。

民話の痕跡がある。へびのモデルになったのは船橋大神宮にある灯台だ。木に登り、目をピカピカ光らせ、沖に出た漁師たちに帰るべき場所を知らせていたという。今では新成人の門出を祝う「灯明台祭」で年に一度灯されるだけだ。だが、今でも多くの漁師がいる船橋をへびともに見守っているのではないだろうか。夏の暑い日住宅地から飛び出せば、そこは民話の世界だった。

編集後記

新聞作りは 山あり、谷あり

船橋市立船橋小学校5年
有賀 悠晴さん

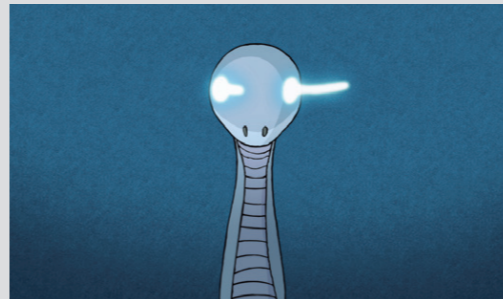


有賀悠晴さん

船橋市に「雪解け塚の白へび」という民話があることを全く知らなかった。学校では本格的な新聞を書いたことはなかったが、新聞社の方々に教えてもらって、表現の難しさや色んな工夫があることが分かった。

海と日本プロジェクト

さまざまなかたちで日本人の暮らしを支え、ときに心の安らぎやワクワク、ひらめきを与えてくれる海で進行している環境の悪化などの現状を、子供たちをはじめ全国の人たちが「自分ごと」としてとらえ、海を未来へ引き継ぐアクションの輪を広げていくため、日本財団、総合海洋政策本部、国土交通省の旗振りのもと、オールジャパンで推進している。



「雪どけ塚の白へび」のワンシーン

雪どけ塚の白へび

昔、夏見城を囲む土塁の近くに「雪どけ塚」と呼ばれる不思議な小高い塚があった。松の木の根元の穴に住む白へびは夜になると姿を現し、光る目の美しさや、やさしく気品のあるたたくまいで村人を魅了していた。ある日、出漁していた漁師が嵐に遭い、沖に流された。遠方に見つけた青い光を白へびの目だと信じて死に物ぐるいでかいをこぎ続けた…。



一般社団法人 日本海苔協会

